

日本手話の視覚表現に基づく虚構移動

今里典子*

Fictive Motion in the Visual Expressions in Japanese Sign Language

Noriko IMAZATO*

ABSTRACT

This paper explores expressions of visual perception in Japanese Sign Language (JSL), comparing the corresponding expressions in Japanese. It is shown that these expressions in JSL are also based on three kinds of fictive motion, which are firstly proposed for Japanese by Matsumoto (2004). The three kinds are visual emanation, movement and processing of visual image, and movement of the point of visual attention. It is also argued that these expressions of visual perception are established by utilizing patterns of JSL motion constructions. Those patterns consist of a motion verb conflated with a CL (classifier) as a moving entity and often with manner of motion, and sometimes with a preceding manner verb, and a co-occurring CL as the boundary through which the movement of the motion verb is made. However the verbal expression representing the “crossing of the boundary” never follows the motion verb, though it is one of the essential components for the pattern of motion construction in JSL.

Keywords: JSL, fictive motion, expressions of visual perception, CL

1. はじめに

視覚的知覚を表現する文の中には、実際に物体が移動する場合に使われる表現が現れる事がある。一部の視覚表現には、現実には起こっていない虚構移動 (fictive motion) が関与しているという Talmy (1996, 2000a, b)⁽¹⁾⁻⁽³⁾ の指摘を出発点として、松本 (2004) は、「日本語の視覚表現にも同様の虚構移動が関与する事を指摘し、その性質について考察」(112:15-6)⁽⁴⁾ している。そしてその移動には、以下の (1)～(3) の例に見るように、視覚的放射、映像の移動、注視点の移動の3つがあり、それらが人間のどのような認知基盤の上に成り立っているかを議論している。

- (1) 視覚的放射
太郎はその窓から山の方を見る。
- (2) 映像の移動
富士山が目飛び込んで来た。
- (3) 注視点の移動
花子はその子に目を移した。

本論では、松本の日本語を対象とした研究によって明らかにされた3種類の視覚に基づく虚構移動表現に対応する表現が、音声日本語とのバイリンガルである聾者が第1言語とする日本手話 (以下、JSL) でも見られるのかどうか、また、3種類の虚構移動以外の表現の可能性があるのかどうかを観察し、日本語との相違を明らかにする。その上で、JSLにおいて、視覚表現に基づく虚構移動表現を成立させる構文構造との関係についても明らかにしていく。

2. 日本手話の[見る]動詞

日本手話においては「見る」にあたる複数の動詞があり、それらには使用にあたっての区別がある。最も使用頻度が高い[見る 1]という動詞は、人差し指と中指を伸ばして目の近くにおき、指先を知覚対象に向ける手形で表す。次に[見る 2]は、人差し指と親指の指先を接触させて輪を作った手形を、その輪からのぞき見るように目にあてがう仕草で表現される。[見つめる]は、[見る 2]と同じ手形の両指の接している部分を、目の少し下に接触させる表現、[眺める]は、5指を伸ばし軽くたわめた手形の親指

* 一般科 准教授

側を、掌を下にして目の上にあてがう表現である。以上4つのうち後半の2つ、つまり[みつめる]と[眺める]は手形の位置がどちらも目の付近と決まっており、手形を移動させることはできない。しかしながら、[見る1]と[見る2]では、(4)でみるように、サイナーの目の位置から知覚対象の方向へ手を移動させてあらかわすことが可能である。

- (4)a. [友達 i] [見る 1 S-i]
 b. [友達 i] [見る 2 S-1]
 (私が友達を見る)

しかし、(5)で見るように、[見る1]は2人称や3人称からサイナーを見ることもでき、主語の人称に制限はないが、[見る2]は、1人称以外の位置から手形を動かす事で1人称以外を主語とすることはできない。

- (5)a. [友達 i] [見る 1 i-S]
 b. *[友達 i] [見る 2 i-S]
 (友達が私を見る)

このような差異は、二つの動詞があらかわす意味の違いから出ていると考えられる。[見る2]には通常、何かを積極的に見ようとする意思が必要であって、例えば、自分が好む映画や演劇、テレビなどを積極的に見ようと思って見る場合に使用される語彙であるが、[見る1]にはそのような知覚者の意図や意思の含意があってもかまわないが、必ずしも必要でなく、何か「見える」という場合も含めて使用される語彙である。サイナーは、自分自身が見ようとする意思があるかどうかは自分で認識できるが、自分以外の2人称や3人称の意思を確認することは不可能なので、1人称であるサイナー自身の位置[S]から知覚対象[i]へ手形を動かして[見る2]ことは出来るが、その逆の動きは許されないのである。

[見る2]には移動について今述べたような主語の人称制限があるものの、少なくとも[見る1]も[見る2]もサイナーの位置[S]からの手形移動に制限はない。このように、手形を移動させる事が可能な動詞は、その動きの始点が主語である知覚者を表現した位置に、終点は目的語である知覚対象を表現した位置にそれぞれ一致する。そこでこのような動詞は、“一致動詞”と呼ぶ。他方、[みつめる]や[眺める]のように、手形の移動が許されず、結果として主語である知覚者および目的語である知覚対象の位置と一致を起さず、他の方法を利用しなければ文法関係をマークできない動詞は、“非一致動詞”と呼ぶ。

これら JSL の視覚に関する動詞の特徴をふまえて、次節では、視覚表現にみられる虚構移動を考察する。

3. JSL の視覚表現に基づく虚構移動

3. 1 視覚的放射

松本では、まず次の日本語の例を提示している。

- (6)a. 部屋の中から窓越しに空を見た。
 b. 空を見上げた。
 c. その子に目を注いだ。

JSL において、(6c)をはじめとする流動体のメタファーに基づく表現方法は見当たらないが、(6a)、(6b)に類似する表現を見つける事ができる。

- (7)a. [壺] [覗く] [見る 1 S-D]
 [CL C]-----|
 (私は壺の奥を覗きこんで見る)
 b. [階段] [友達] [PT Ui] [見る 1 S-Ui]
 (私は階段の上にいる友達を見る)

(7a)では、両手で壺の形を作り、非利き手で壺の口の丸い形をイメージした[CL C]を作り、非利き手はそのままで、覗き込むような仕草をしてから[見る1]の手形をサイナーの目の位置から[CL C]の横を通り過ぎてさらにずっと下まで手を伸ばして移動させ、壺の底まで視線を届かせることを表現する。手が動く距離は目の位置から底までの深さをあらかわしている。また(7b)では、[PT Ui]で表したように、目の高さより上の前方の位置を指差して、そこが[友達]の位置であることを示してから、その位置を目ざして[見る1]を目の位置から移動させる。これらの例をみると、少なくとも[見る1]と[見る2]では、「目から出ると考えられる放射物が視線に沿って移動する」(113:24-5)⁽⁴⁾ことが、実際の手の動きとして表現されると考えても差し支えないだろう。JSL では、視線が、知覚対象の方向へ向かう手形の移動として、手話空間内に具現化しているわけである。

さらに、視覚的放射の例として、JSL には、日本語ではみられない例がある。「友達が2人、1人は建物の2階に、もう1人は1階にいて、1階の友達が2階の友達に手を振っている。」という状況の映像をサイナーに提示して、その内容を状況の観察者の視点から JSL で表現してもらったところ、以下の(8)に見るようなバリエーションが得られた。但し、1階の友人(非利き手側下の位置: YD)が2階の友人(利き手側上の位置: XU)に手を振る部分の述語部分のみ抜粋し記述したことをことわっておく。

- (8)a. [手を振る YD<XU]
 b. [手を振る YD<XU] [見る 1 YD-XU]
 [body YD<XU]

- c. [手を振る YD<XU] [移動する YD-XU]
 [body YD<XU]
 (下にいる友達が上の友達に手を振る)

(8a)において、[手を振る]は、さよならを言うときのように手を振る仕草で表す典型的な非一致動詞のみでの表現なので、文法関係は、手の動き以外の方法、つまりサイナーの体の位置(YD:主語)と体の向き(<XU:目的語)として表現されることになる。

映像の状況を表す JSL の文として、(8b)や(8c)の表現を表出するサイナーもいた。(8b)は、[手を振る]という非一致動詞に一致動詞の[見る 1]を付加した表現である。(8c)は、同じ非一致動詞に、指差しと同じ手形である[CL ヒ]を YD から XY までまっすぐに移動させる一致動詞[移動する]を付加する。興味深い事に、(8c)を表出したサイナーからは、[移動する]は移動動詞であるが、同時に 1 階にいる友達から 2 階にいる友達への視線の意味が含まれているというコメントを得た。つまり(8b)や(8c)の例は、[手を振る]際に主語である 1 階の友達から目的語である 2 階の友達に注がれる視線を意識し、その視線自身や視線の動きを具現化した[見る 1]や[移動する]という一致動詞を追加する事で、[手を振る]という述語の主語・目的語を明らかにして表現する働きを持たせていると考えられる。但し、一致動詞を付加するどちらの例でも、[手を振る]を表現する際に、サイナーの体の位置は 1 階にいる友達の位置[YD]にあり、体の向きも 2 階の友達の方向[XU]に向けておく必要がある。つまり、主語と目的語の関係は、サイナーの体の位置および向きと、付加する一致動詞で手形が移動する際の始点および終点と、その両方を使って重複して明示される。

(8c)では、文法関係を明示する機能を持つ[移動する X-Y]を見たが、これと同形の別の JSL 表現が存在する。この表現は[移動する]と同じように、指差しの[CL ヒ]の手形を、そのまま指先方向に大きな弧を描くように動かす表現であり、その始点と終点によってそれぞれ主語と目的語を明示する機能を持つ。Fischer(1996)⁽⁵⁾では[AUX]と記述されて紹介されているので、本論でもこれに従い、主語[i]の位置から目的語[j]の位置までの移動を[AUX i-j]のように記述する。

- (9)a. [彼 i] [彼女 j] [AUX i-j] [知る]
 b. *[彼 i] [彼女 j] [知る] [AUX i-j]
 c. [彼 i] [彼女 j] [知る] [AUX i-j]
 [body i/<j]
 (彼は彼女を知っている)

述部が、[知る]、[知らない]、[好む]、[嫌う]など

の典型的な非一致動詞の場合に、(9a)のように表現されることがある。[AUX]の位置は一致動詞の前であり、(9b)のように後置する事はできない。しかし、(9c)のように、非一致動詞を表現する際に、[body i/<j]のように体の位置や向きで主語や目的語をマークして、主語・目的語マーク機能を表す責任を軽減すると、(9c)は問題なく容認されるようになる。このような言語事実から、[AUX i-j]は、(8b)のような虚構移動表現と構文上の類似性が高い事がわかる。さらに、この[AUX]も視覚、特に視覚的放射の表現と関係があることを見ておきたい。

- (10) [彼 i] [彼女 j] [見る 1 i-j] [知る]

例文(10)は(9a)と同じ意味を表す。但し(9a)は「顔は知っている」、(10)は「性格や考え方までよく知っている」という含意があり、意味の区別がある。(9a)や(10)の例に至っては、非一致動詞の前という決まった位置を獲得し、主語・目的語を区別する機能をもつ文法的な要素(助動詞)になっており、(8c)の移動動詞に類似しているが、虚構移動の表現ではもはやなくなったものだと考えられるだろう。

(8b)の例は日本語では見られない例で、JSL に独自の表現である。

3. 2 映像の移動

映像の移動については、以下のような例がある。

- (11) [富士山 i] [近づく i-S] [PTi]
 (富士山が目に入る)

サイナーの前方に[富士山]を表し、それと同じ位置から、掌をサイナー側に向けて 5 指を伸ばした両手をそのまま同時にサイナー自身の目に向かって移動させる。もちろん富士山が動くわけではなく、富士山の映像が目近づいてくる、つまり「目に入る」という意味を表す。

3. 3 注視点の移動

注視点の移動に関する例で、日本語では「目を移す」、「目を止める」のように注視点がメトニミーに基づいて「目」という名詞によって表現される例が多くみられるが、JSL では手形の指先方向が注視点を表している[見る 1]や、[見る 2]などの手形を、実際の注視点の移動に応じて手話空間内を自由に移動させて表現する。(12a)では、[見る 1]の手形の指先を、[本]を表す[CL テ]から上に移動させることで表現する。(12b)に見るように、移動の始点と終点を表す[から]や[まで]とも問題なく共起できる。

- (12)a. [本 i] [CL テ i] [見る 1 i-U]
 (本から目を上げる)

- b. [PT X] [から] [PT Y] [まで] [見る X-Y]
(端から端まで見る)

また「目をとめる」という表現は、JSL でも、手形の移動を実際に途中でとめてその位置で保持する(hold)ことで表す。

- (13) [見る 1 X-Y hold]
(Y に) 目をとめる)

3. 4 視覚的放射への注視点の移動

日本語にみられる3種類の移動だけでなく、JSLでは、視覚的放射と注視点の移動が一度に関与して組み合わせられた用例が存在する。(8)で見られたパジェーションの1つに次のような例がある。

- (14) [手を振る<U]
[友達] [CL ナ YD]---| [移動する YD-XU]
[body YD<F / WHQ]

まず非利き手で1階にいる友達を[CL ナ]の手形で非利き手側下部の位置[YD]に作り、その手を空間内に残したままで、次に利き手で顔は上に向けて[手を振る]。この2つの表現を同時に終えて、次に非利き手の手形[CL ヒ]を、[YD]の位置から2階の[XU]の位置まで滑らかに移動させる。この移動は既に(8c)で見たように、主語である1階の友達の視線を移動動詞で表した表現である。[移動する YD-XU]の主語が[CL ナ YD]であることは、サイナーの体の位置が[YD]の位置にあること、手形の移動が[YD]の位置からはじまっている事からわかる。ところが同時に、サイナーの体は前方に傾けられ([<F]), かつ WH 疑問の意味をあらわす眉寄せの表情が伴われている。つまりこの[移動する YD-XU]の動詞は、この状況を観察しているサイナーが、なぜ1階にいる友達は上を向いて手を振っているのか疑問に思いながら、その友達の視線をなぞるように1階の友達の位置[YD]から2階[XU]まで注視点を移動させているという意味も含んでいる。この場合には、WH 疑問とサイナーの体の前方への傾きという2つの指標から、[移動する YD-XU]の主語はサイナー自身であるとも解釈されるのである。このような例は3次元の手話空間を利用したJSLに特徴的な表現だと言えるかも知れない。

3節では、日本語で見られる3種類の視覚表現に基づく虚構移動に対応する表現の多くがJSLにも存在し、かつ(8b)(8c)で見たように、JSLのみで見られる表現や、それが独自に発展して文法要素を作っている可能性も示唆した。さらに(14)で3種類の視覚表現のうち視覚放射と注視点移動の2つが1つの動詞で同時に実現することが可能である事も見た。

次節ではJSLの移動構文のパタンを見た上で、これらと、既に見た視覚表現との関係を明らかにする。

4. 移動構文の述語の構造と視覚表現

4. 1 JSL 移動構文のパタン

JSLの移動構文の述語部分の構造には典型的なパタンがある。代表的な様式4つとその複合のパタンを、それぞれの例と共に見ていく。

なお、ここで“移動動詞”とは、例えば[行く]、[来る]が[CL ヒ]の手形を、指先を下にして移動の始点から終点までなめらかに動かすことで表現されるように、手形の動きの始点および終点が、実際の物体移動の始点および終点を手話空間に写像した位置と一致する表現のことを指し、一致動詞に分類される。

移動動詞の特徴として、[行く/来る]のように手形[CL ヒ]が手話空間内で動くその移動のみで表す語彙もあれば、[歩く]のように、移動する人間が[CL ナ]の手形で、「徒歩で」という様態が手形の動かし方として包含され、語彙化されている場合もある。また、[ヨロヨロ歩く]のように、あとから動き方の変化で、速度を含む様態が包含される場合もある。

他方“様態動詞”とは、[走る]、[泳ぐ]等のように、体全体で実際にその仕草を行う表現で、表現上、手形の移動を含まない非一致動詞の事をいう。

次に、“非利き手境界”とは、例えばサッカーの「ゴール」の中と外のように、隣接する2つのエリアを分ける境界の位置を明示するため、主に非利き手で表す手形のことで、移動動詞と頻繁に共起する。例えば、非利き手で、ゴールポストの枠をかたどった手形[CL テ]を作り、同時にその手形が形成する内側のエリアを通り過ぎるように利き手の移動動詞の動きを表現することで、ボールがゴールに入った事を表現するような場合の[CL テ]を指す。

最後に“利き手境界”とは、例えば「出る」「帰る」「入る」などの有限個の動詞を移動動詞や様態動詞の必ず後に表現することで、前置された動詞であらわされる移動が、ある境界を越えたことを示す方法である。なお、代表的な4つのパタンのそれぞれの例は、順番に(15a)~(15d)に対応している。

代表的な4つのパタン

- (A) 様態動詞 + (様態) 移動動詞
(B) φ + (様態) (CL) 移動動詞
(C) 非利き手境界 / (様態) 移動動詞
(D) (様態) 移動動詞 + 利き手境界

- (15)a. [女] [道] **[走る]** [CL ヒ_歩く S-F]
(彼女が道を走って行く)
b. [女] [道] **[歩く S-F]**
(彼女が道を歩いて行く)

- c. ([ボール]) [ゴール] **[移動する S-F]**
[CL テ]
 (ボールがゴールに入る)
- d. [女] **[CL ヒ_歩く S-F]** **[出る]**
 (彼女が歩いて行ってしまった)

これらの例で見ると、JSL の移動表現の述部は、移動物や様態が包含される可能性がある移動動詞を中心に、その前に、様態動詞が付随するかしないか、またはそれと非利き手境界が共起するかしないか、その後利き手境界が付随するかしないか、という可能性の組み合わせで表現される事がわかる。

従って、例えば、(A)に(C)で見たような非利き手境界が組み合わさると次の(16)、そして(A)に(D)で見たような利き手境界が組み合わさると(17)のような表現が可能になる。

(A)+非利き手境界

- (16) [門] **[自転車こぐ]** **[CL テ移動する S-F]**
[CL ヒ]-----/
 (門の向こうに自転車をこぎ入れる)

(A)+利き手境界

- (17) [女] [道] **[走る]** **[CL1-歩く S-F]** **[出る]**
 +(PA)
 (彼女が道を走って行ってしまった)

このような複雑な組み合わせの可能性も含めて、移動表現の述部の構造類型を(18)にまとめておく。+を付した横の並びは語順を、上下に書き分けているのは共起関係を表す。下線部の要素は最低限必要で、それ以外は表現されないこともある。JSL の典型的な移動表現の述部は、これらの各部分に対応する語彙を当てはめることで作りだされる。

(18) 移動表現の類型

様態動詞 + 様態/CL/移動動詞 + 非利き手境界
 非利き手境界

移動表現における述部の最低限の表現は、一致動詞である移動動詞、言い換えると、ある手形が手話空間内で、始点から終点まで移動する表現である。つまり名詞表現(例えばCL)を手話空間内で動かせば、そのものが移動したと理解される訳である。例えば[見る 1]は[行く/来る]や[歩く]のような、いわゆる移動動詞ではないが、手形の2本の指を伸ばした形が2つの目とその視線を表現していることは明らかで、具体的な視線の移動が手話空間内で具現化していると理解するのは自然なことだ。言い方を変えれば、視覚表現である[見る 1]や[見る 2]は、移動表

現を基盤に生まれて来たと考えられる。認識されている物体の、または視線や注視点の始点から終点までの移動が、手話空間内ではどちらも手形の始点から終点までの移動として具現化し、それゆえどちらも一致動詞として分類される事になる。両者の違いは、[見る]では、手形が移動する始点と終点が、動詞の主語と目的語をマークする機能をもつが、移動動詞の場合には、文法関係とは関連しない点である。それでは、視覚表現は全ての可能な移動構文の述部のパターンに従うのだろうか。

4. 2 移動表現と視覚表現の関係

既に見た視覚表現を、もう一度移動表現のパターンと比較して、両者の関係について明らかにしておく。既に見た視覚に基づく虚構移動の例において、例えば、(A)のパターンは、視覚的放射の(8b)(8c)の例に見られる。(B)のパターンは、視覚的放射では(4a)(4b)(7b)、映像の移動では(11)、注視点の移動では(12)の例が観察される。(C)では、例えば(7a)を非一致動詞の[覗く]を削除して以下に見るように変えた文も文法的で、その例となる。

- (7)a' [壺] [見る 1 S-D]
 [CL C]--- |
 (私は壺の奥を見る)

さらに上で見た(A)と非利き手境界が複合したパターンは(7a)の例がそれにあたる。ところが、(D)で見た利き手境界とその他の要素の複合は、一切例が見当たらない。視覚表現(またはそれに基づく虚構移動の表現)は、JSL の移動表現を利用して作られているのではなく、“境界越え”の述部を含む表現だけは利用していないのである。この理由は知覚対象を見るという行為の認識に関わりがあると思われる。何かを「見る」場合には、見る目標はまさに知覚対象であり、視覚的放射としての視線は、知覚対象の位置が終点であり、それを越えていくような状況は想定できない。故に、物体の移動を表現する場合の“境界越え”の表現は虚構移動をそのベースにするといえども、視覚表現内に現れることはない。

5. まとめと課題

日本語で見られるような視覚表現に基づく、視覚的放射、映像の移動、注視点の移動の3種類の虚構移動表現が、JSL においても対応する表現例が全て存在することを明らかにした。また視線移動の例では、日本語には見られない、JSL のみに観察される虚構移動の表現が見られ、かつそのような表現が発展して、助動詞として存在している可能性も示唆した。さらに、JSL の視覚表現は移動表現のパターンを

利用して表現されており、一部は[見る 1]のようにすでに語彙化しているものもある。一方で、視覚の虚構移動表現では、移動表現パタンのうち、いわゆる“境界越え”のパタンだけは取れないが、その現象にも人間の視覚経験に裏打ちされた理由があることをみた。

今後は、JSL のみで観察された虚構移動の表現が助動詞として発展しているという可能性が正しいかどうか実証的に研究する必要があると考える。また、視覚以外の知覚表現が同様の虚構移動表現を作るのかどうかも観察が必要であろう。

凡例

本文内では日本語の語彙は「日本語」のように括弧で囲んであるが、JSL 表現については以下のルールに従って記述している。

[]	: 手話語彙
S	: サイナー (= 1 人称) およびその位置
X	: サイナーの利き手側の位置
Y	: サイナーの非利き手側の位置
D	: サイナーの下方の位置
U	: サイナーの上方の位置
F	: サイナーの前方の位置
B	: サイナーの後方の位置
S-D	: (一致動詞で) 手形の S から D の位置への移動
X<Y	: X から Y の方向向きに表現
[CL C]	: 類辞. 指文字 C の手形 5 指を全て伸ばして C を作った手形
[CL テ]	: 類辞. 指文字テの手形 5 指を全て伸ばした手形
[CL ヒ]	: 類辞. 指文字ヒの手形 人差し指のみ伸ばした手形
[CL ナ]	: 類辞. 指文字ナの手形 人差し指 / 中指を指先下で伸ばした手形
PT	: 指差し
PA	: 完了. 口形「パ」を動詞と共起
i / j	: 同じ節内で複数の語彙に付いて 同位置を指示
[body i]	: 体が i の位置に存在
[body <i]	: 体が j の方向向き
[hold]	: 手形をしばらく同じ位置で固定
---	: この前に書かれた表現が、 に記載されている表現が終わるまで共起
/	: その前後の語彙が共起
WHQ	: WH 疑詞. 眉寄せ

謝辞

*論文内のデータについては、次の方々にお忙しい中

貴重な時間を割いて撮影に御協力を頂き、また表現に関する貴重なコメントもいただいた。撮影に参加して下さった、浅香諒、小野夏子、小林泉、坂田加代子、志方龍、嶋本恭規、高岡真美、中山美代子、西崎芳正、馬場博史、馬場仁奈、藤井孝子、古隆喜、前川和美、湊惟律子、山本紋子、山本芙由美の諸氏に心からお礼を申し上げたい。なお、論文に残る不備はすべて筆者の責任である。

*本研究は、科学研究費基盤研究(C)「日本手話のコーパスによる類辞構文研究」課題番号：20520405、(研究代表者：今里典子)、および、国立国語研究所共同研究「空間移動表現の類型論と日本語」、(研究代表者：松本曜)を受けている。

参考文献

- (1) Talmy, Leonard: “Fictive Motion in Language and “Ception””, in Language and Space, Bloom P. et. al. (eds.), pp. 211-276, 1996.
- (2) Talmy, Leonard: “Toward a Cognitive Semantics Vol.1: Concept Structure Systems”, Cambridge: MIT Press, 2000a.
- (3) Talmy, Leonard: “Toward a Cognitive Semantics Vol.1: Typology and Process in Concept Structuring”, Cambridge: MIT Press, 2000b.
- (4) 松本曜:「日本語の視覚表現における虚構移動」, 『日本語文法』4巻1号, 2004.
- (5) Fischer, Suzan: “The Role of Agreement and Auxiliaries in Sign Language”, Lingua 98: pp. 103-119, 1996.